

デーリー東北 2023年(令和5年)6月21日(水曜日) (16)

私見創見 Wednesday

大学で八戸小唄の舞踊実習が始まった。学生たちはTシャツにスポンの普段着で、汗をかきかき真剣に練習にいそ

んでいる。本番はそりいの衣を着る予定である。今年、八戸七夕まつり」の流し踊りに、八戸工業大として初出

場するのだ。

夏祭りや盆踊りなど夏の行事には、やはり浴衣がつきものだ。見ていて涼やかという効果もさることながら、着ている側も洋服とは異なる身体感覚を楽しめる。

子どもの頃、盆踊りに参加した際は「ワリの良い『八幡馬』が大好きだった」。歩を進める時の裾さばきや、踊りに合わせて杖がひるがえった。布をまとっている実感があつた。

その頃の浴衣は木綿が多かつたと思う。木綿が私たちの生活に与えた影響について、柳田国男が著書『木綿以前の事』の中で言及している。木綿が一般的になるまで、庶民の日常着の素材は長く麻であった。麻の着物は布が強く突

着る物と着る人

心に作用する日々の衣服



川守田礼子

八戸工業大 感性デザイン学部准教授

かわもりた・れいこ
1967年、旧福地村生まれ。東北大学文学部卒。八戸工業大 二高を経て、2001年より八戸工業大で勤務。人形浄瑠璃文楽などの伝統芸能や染織に関わる文化研究テーマ。第3回インテリジェント・コスモス東北文化奨励賞を受賞。文楽はちのへ塾主宰。

つ張っている。肌あたりも固く、身に着けると真つすく武張った外線を保つ。麻を着ると衣は身体になじまず、丸々とした人の体の表面との間の輪郭を著しく変えたと柳田

は言う。なで肩や柳腰は「フター木綿」の産物というのである。

さらに、「隠れた変動が、我々の内側にも起こっている」と指摘している点が興味深い。木綿は麻に比べ格段に肌触りのよい衣類である。木綿の軽く柔らかく快い圧迫感が、人々の肌膚を多感にし、身と衣類との親しみを大きくする。

また、染めが容易な木綿は多彩な色をまとうことを可能にし、人の感情や生活の味わいを濃やかにしたという。何と大げさな、と思うことなかれ。毎日身に着ける物は、確

かに人の心に作用する。

さて雨の季節が訪れると、思い出す印象深い景色がある。といつても実際に見た景色ではない。幸田文の文章の中に描かれた景色である。今回読み返してみたら梅雨の時期ではなく、秋の長雨であった。細かい雨が降る中、幸田家を訪問した女性客の姿を描いた文章を少々長い引用してみよう。

「門から玄関への敷石道は、ずつと植えた萩に正体もなく突っ伏されて道がなくなっています。そこへお客さんが来

ります。そしてそのまま傘を緩く車のように廻しながら、敷石を一步一歩と行きます。行くにつれて傘はくるりくるりと廻り、濡れた萩は揺れて順々に起きたり返ったりして道を明けます。ほつと息の出してしまうことなことでした。花もきれいな、傘もきれいな、足も人もきれいなと感じました。

なんと美しい歩み方か。着る人の心根と所作のゆかしさよ。幸田文の父である露伴もこれを聞いて、おしやれとはこういうものだと感じたという。 翻つて、おのれの着こなしはどうか。そもその着る物への向き合い方というものを持っているのか。はなはだ心もとなくなる今日この頃である。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。